

國學院大學學術情報リポジトリ

Improvement of Classwork Using the FA System in Basic Seminar A and B

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 広和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002133

基礎演習A・BにおけるFA制度を用いた授業改善

星野 広和

【要 旨】

本稿では、経済学部初年次教育である基礎演習A・Bにおいて、FA（学生ファシリテーター&アドバイザー）制度を用いた授業改善効果について検証する。本報告では株式会社イノベストに調査協力を依頼し、次の分析を行った。(1) FAの学習支援行動を因子分析したこと、(2) FAの学習支援行動に対する受講生からの評価が高いクラスと低いクラスの比較、(3) 学生のタイプ別の比較によるFA制度の有効性の分析、である。

結果として、①FAの学習支援行動によるグループワークの活発化、②FAの学習支援スキルと受講生の学習効果における相関関係、③学生の動機づけに対するFA制度の有効性、が確認された。

【キーワード】

FA制度、FAの学習支援行動、リフレクションサポート、ストレッチサポート、学生のタイプ

1. はじめに

本稿では、経済学部初年次教育である基礎演習A・Bにおいて、FA（学生ファシリテーター&アドバイザー）制度を用いた授業改善効果について検証する。株式会社イノベストに調査協力を依頼し、次の分析を行った。(1) FAの学習支援行動を因子分析したこと、(2) FAの学習支援行動に対する受講生からの評価が高いクラスと低いクラスの比較、(3) 学生のタイプ別の比較によるFA制度の有効性の分析、である。

結論を先に述べると、①FA（学生ファシリテーター&アドバイザー）の学習支援行動によってグループワークが活発化したこと、②FAの学習支援スキルと受講生の学習効果に相関関係があること、③学生の動機づけに対するFA制度の有効性、が確認された。

2. 基礎演習A・Bの課題と平成29年度事業の概要

(1) 学生ファシリテーター配置授業

昨年度に引き続き、平成29年度の学部学修支援事業もまた経済学部のグループワーク形式授業、特に基礎演習A・Bの実施において、その教育効果を挙げるためにFA制度を活用した。現在、課題解決型授業（PBL）といわれるグループワーク形式の授業を実践する際にFAを1クラスに1名ずつ配置し、学生の議論の活性化を促すとともに、学習の支援も行うことを目的としている。対象となる授業科目は「基礎演習A」（1年前期）、「基礎演習B」（1年後期）、「経営学特論（ビジネスデザイン）」（2年前期）、「経営学特論（リーダーシップ）」（1年後期）、である。

(2) 基礎演習A・Bの課題

平成27年度から「アクティブラーニング形式」(以下AL型式と略)の授業トライアルを導入し、平成28年度から全23クラスへ展開している。しかしながら、基礎演習A・Bの課題として、①基礎演習担当教員およびFAスキルのバラつき、②教育ノウハウ(例えば、ファシリテーションスキル)の蓄積が不十分であること、③各クラスの運営におけるバラつき、が指摘されており、基礎演習各クラスの標準化および均質化には従前より課題があった。

(3) 平成29年度事業の概要

平成29年度の学部学修支援事業では、上記の課題の解決を図るために、AL型式の教育手法に実績のある第三者(株式会社イノベスト)を通じて、FA制度の構築と運用に対する助言と評価を行ってもらい、「基礎演習A・Bの授業評価の改善ならびに教員スキル向上を図ること」を目的とした。その内容は、以下の4点に集約される。①FAのスキル向上を目指したワークショップの実施、②FAによる授業改善提案を引き出すワークショップの実施、③FAが考案した授業改善提案の教員向け報告会の実施、④FA制度の効果測定アンケート実施および総括レポートの提出、である。これによって、基礎演習A・Bの現状と課題の可視化を行った。

3. アンケート調査について

(1) 調査目的

調査は株式会社イノベストに依頼し、FAの学習支援行動がどのような学習効果に影響を与えているか、どのようなタイプの学生に効果的であったかを把握するために行われた。

(2) 調査の概要

調査は前期2回と後期1回の計3回実施されている。前期調査では、イノベスト社は基礎演習Aを受講した学生に対し、「FAの学習支援行動がどのような学習効果に影響を与えているか、どのようなタイプの学生に効果的であったかを把握」するため、2017年6月(事前調査)と8月(事後調査)に実施された。アンケートは各クラスの任意で実施し、235名(6月)、87名(8月)から回答を得た(図表1参照)。以下では、イノベスト社によるアンケート調査(「基礎演習Aアンケート結果報告:学生のタイプ別にみるFA制度活用の効能」)をもとに、前期の調査についての概要および調査結果を記述する。

この調査では、FAの学習支援行動を測定する調査項目として、全9項目(FAの学習支援行動、社会人基礎力、アカデミック・スキル、大学生生活の過ごし方、学習動機、大学生生活の重点、将来設計、2つのライフ、充実感、経験学習スタイル)からなる全154設問のアンケートを実施した。

図表1 学科別回答者内訳

学科別の回答者内訳 (男性/女性)				
性別	経済	経済ネットワーク	経営	合計
事前 (2017年6月末)	106 (68,38)	76 (49,27)	53 (29,24)	235 (146,89)
事後 (2017年8月末)	48 (31,17)	28 (18,10)	11 (6,5)	87 (55,32)
合計	154 (99,55)	104 (67,37)	64 (35,29)	322 (201,121)

(出所) イノベスト (2018) 「國學院大學経済学部 基礎演習A アンケート結果報告—学生のタイプ別にみるFA制度活用の効能」、p.2。

4. アンケート調査結果

(1) サマリー

アンケート調査の要点は次の3点である。

第1に、FAの学習支援行動の設問を因子分析した結果、3因子、すなわち a) 学習プロセスのファシリテーション、b) ロールモデルとしての行動、c) グループワークのファシリテーションの中でも c) を支援していたこと。

第2に、FAの学習支援行動に対する受講生からの評価が高いクラスとそうでないクラスの比較の結果、FAの学習支援行動に対する受講生からの評価が高いクラスの方が学習効果も高いこと。

第3に、学生のタイプ別の比較によるFA制度の有効性を分析した結果、明確な動機がなく大学生活を送っている傾向にある学生に対して効果的であったこと。

(2) アンケート調査結果の分析

①FAの学習支援行動の設問を因子分析

FAの学習支援行動に関する10項目をもとに因子分析を行い、解釈可能な3因子を抽出した。それぞれの因子を「学習プロセスのファシリテーション」「ロールモデルとしての行動」「グループワークのファシリテーション」と命名した(図表2参照)。結果として、FAの学習支援行動のなかでも、特に「グループワークの活発化」を支援する「グループワークのファシリテーション」が高かった。

なお、学習支援行動には、「リフレクションサポート」と「ストレッチサポート」の2つが挙げられる。「リフレクションサポート」の具体的行動としては、授業で学んでほし

図表2 FAの学習支援行動の因子分析結果

FAの学習支援行動の因子分析結果					
設問	第1因子 学習プログラムの フィードバック	第2因子 ロールモデルとしての行動	第3因子 グループワークの フィードバック	第4因子 対話的能力	第5因子 自己学習意欲
FAの企画やプログラムを自分で企画するよりも他の人のことで 運営を任せて貰えること	0.846	-0.095	-0.028		0.711
FAの自分の考えを説明するより受容されたことで 自分の考えが整理されること	0.886	0.067	-0.04		0.744
FAの自分の考えに対して質問を受け られること、自分の考えが深まった こと	0.766	0.177	0.118		0.751
FAの自分の考えを説明して他人から 自分の考えが分かることで満足すること	0.524	0.027	0.347		0.511
FAによる知識の共有が自分の学習の成果を高めること に効果的であること	0.047	0.072	-0.028		0.547
FAで、教員や講師の指導を受け ながら学ぶことが出来ること	0.007	0.715	0.198		0.706
FAでは、お互いに意見を交換し合うことで自分の 思考が整理されること	0.029	0.848	0.028		0.606
FAのプログラムに参加することで自分の学習内容を 自分のグループのメンバーと共有できること	0.036	-0.064	0.716		0.588
FAのグループで議論を行うことで自分の グループのメンバーと意見が一致すること	-0.125	0.347	0.621		0.545

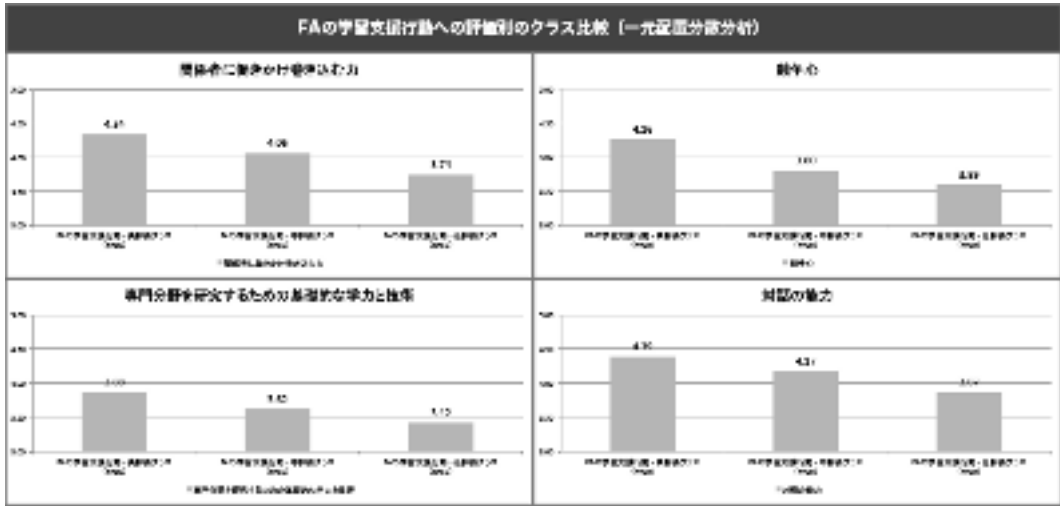
(出所) イノベスト (2018) 「國學院大學経済学部 基礎演習 A アンケート結果報告—学生のタイプ別に
みるFA制度活用の効能」、p.7。

いことを明確にする、再び成功したり失敗したりしないために今後どうしたらよいかを考えさせる、授業で学んでほしいことに照らして現時点でどれくらい到達できているかを示し受講生の成長を促す、受講生の改善点について気づかせる、がある。一方で、「ストレッチサポート」の具体的行動としては、受講生の姿勢や努力を認める言葉をかける、受講生の自由な発言を促す、タイミングよく相づちを打つなどして率直な意見を引き出す、受講生の考えや価値観を知るように努める、などがある。もちろん、この2つの学習支援行動は相互作用的に影響を与えるわけであるが、とりわけ今回の調査では「ストレッチサポート」に関する影響力が見られた。

②FAの学習支援行動への評価別のクラス比較

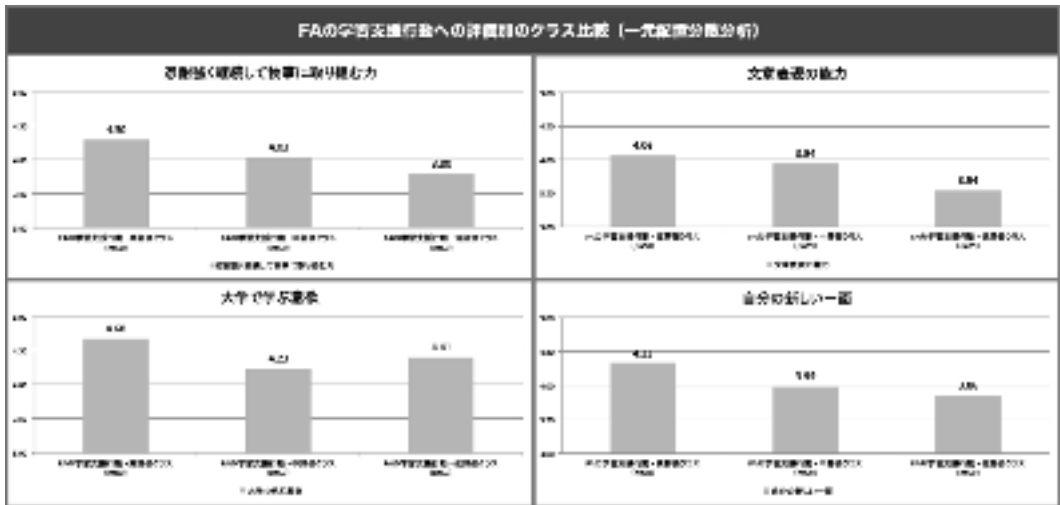
FAの学習支援行動が受講生の学習効果に好影響を与えているかを確認するために、FAの行動に対する受講生からの評価をもとに「FAの学習支援行動への高評価クラス・中評価クラス・低評価クラス」に分類した。アンケート項目は、社会人基礎力とアカデミック・スキルに関する全41設問（例えば、FAの学習支援行動、物事に主体的に取り組む力、関係者に働きかけ巻き込む力、目標を設定し確実に行動する実行力など）のうち、8設問において有意差（5%水準）が見られ、FAの学習支援行動によって受講生の学習効果に違いが生まれることが確認できた。有意差が見られた8つの設問とは、「関係者に働きかけ巻き込む力」「競争心」「専門分野を研究するための基礎的な学力と技術」「対話の能力」「忍耐強く継続して物事に取り組む力」「文章表現の能力」「大学で学ぶ意欲」「自分の新しい一面」である。

図表3 FAの学習支援行動への評価別のクラス比較



(出所) イノベスト (2018)「國學院大學経済学部 基礎演習 A アンケート結果報告—学生のタイプ別にみるFA制度活用の効能」、p.12。

図表4 FAの学習支援行動への評価別のクラス比較 (続き)



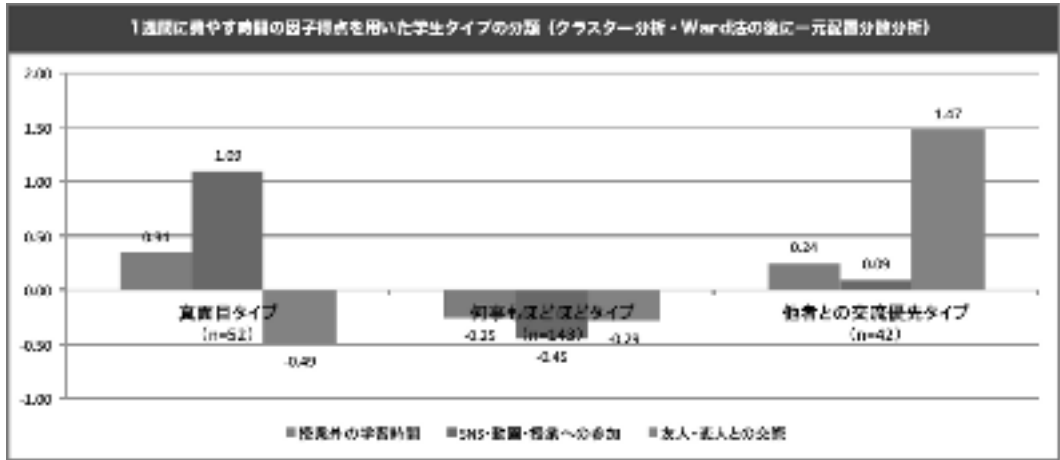
(出所) イノベスト (2018)「國學院大學経済学部 基礎演習 A アンケート結果報告—学生のタイプ別にみるFA制度活用の効能」、p.13。

結果として、FAの学習支援行動に対する受講生からの評価が高いクラスの方が学習効果が高かった (図表3、4 参照)。

③学生のタイプ別の比較によるFA制度の有効性の分析

大学生活の過ごし方に関する17項目に対して、経済学部1年生が「1週間に費やす時間

図表5 1週間に費やす時間の因子得点を用いた学生タイプの分類

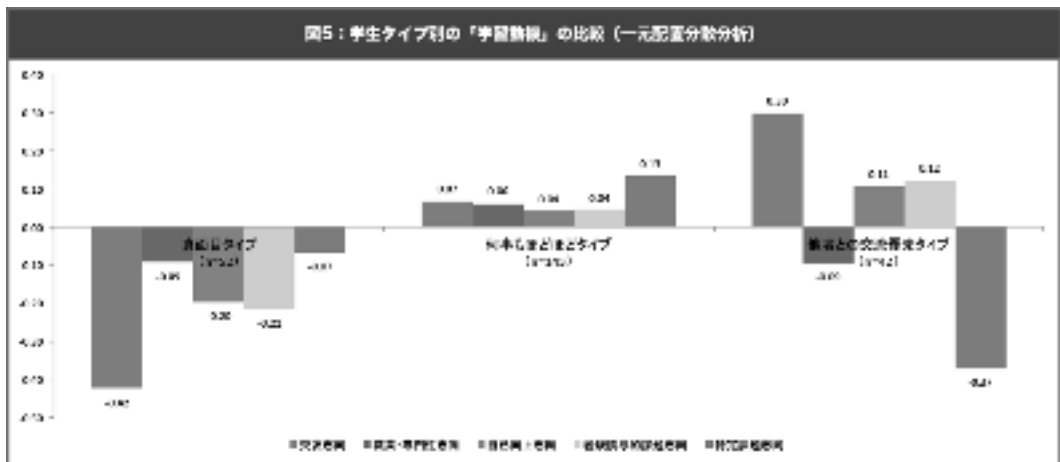


(出所) イノベスト (2018)「國學院大學経済学部 基礎演習 A アンケート結果報告—学生のタイプ別にみるFA制度活用の効能」、p.17。

数」を因子分析し、解釈可能な3因子を抽出した。それぞれの因子は、「授業外の学習時間」「非能動的な授業参加」「友人・恋人との交際」と命名された。1週間に費やす時間に関する設問をもとに、授業外の学習、SNS・動画・授業への参加に多くの時間を費やす「真面目タイプ」、何かに特別に多くの時間を割かない「何事もほどほどタイプ」、何よりも「友人・恋人との交際」に時間を費やす「他者との交流優先タイプ」の3タイプの分類を行った(図表5参照)。

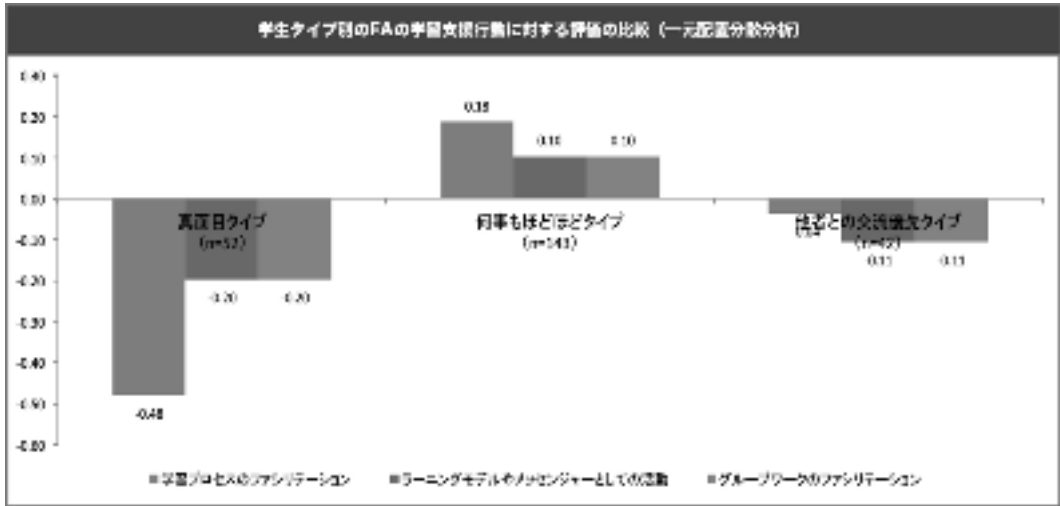
さらに学生のタイプを明確に理解するために、どのような動機で学習しているかを測定する学習動機の設問をもとに確認的因子分析を行った¹(図表6参照)。結果として、交

図表6 学生タイプ別の「学習動機」の比較



(出所) イノベスト (2018)「國學院大學経済学部 基礎演習 A アンケート結果報告—学生のタイプ別にみるFA制度活用の効能」、p.20。

図表7 学生タイプ別のFAの学習支援行動に対する評価の比較



(出所) イノベスト (2018) 「國學院大學経済学部 基礎演習A アンケート結果報告—学生のタイプ別にみるFA制度活用の効能」、p.24。

友志向において、「真面目タイプ」と「他者との交流優先タイプ」の間で有意差が見られた。また特定課題志向において、「何事もほどほどタイプ」と「他者との交流優先タイプ」の間で有意差が見られた。「他者との交流優先タイプ」の時間の使い方に納得のいく結果が得られ、「何事もほどほどタイプ」も明確な動機がないまま学んでいることが分かった。

タイプごとに、FAの学生支援行動に対する評価の違いを比較した結果、「何事もほどほどタイプ」に比べると、「真面目タイプ」と「他者との交流優先タイプ」の学生に対する支援の仕方に改善の余地があることが分かった。つまり、比較的明確な動機がないまま学習している「何事もほどほどタイプ」の学生に対して、FAの学生支援行動が有効的であることが判明した (図表7参照)。

5. おわりに

本調査を通じて判明した点は以下の3点である。第1に、FAの学習支援行動によってグループワークが活発化することであり、特にストレッチサポートのスキルが大きな影響を与えることである。第2に、FAの学習支援スキルと受講生の学習効果に相関関係があることである。つまり、FAの学習支援行動に対する受講生からの評価が高いクラスの方が学習効果も高いことがわかった。第3に、FA制度は、特に「明確な動機がないまま大学生活を送っている傾向にある学生」に効果的であり、それは経済学部生の大半を占めるタイプでもあることから、影響力や波及性という面からも有効といってよい。

本稿を締めくくるにあたり、今後に向けた改善点を3点指摘しておきたい。第1に、今

回の報告の結果にもとづいて次年度以降もモデル授業案やシラバスへ反映することであり、FAと教員相互による結果分析と情報共有が求められることである。第2に、FAと教員による事前打ち合わせの徹底である。今回の調査結果からも、FAの学習支援行動（リフレクションサポートおよびストレッチサポート）が効果的であることが判明したが、それは教員への理解と反映が不可欠である。第3に、そのためには教員のファシリテーションスキルやコーチングスキルの向上も不可欠であり、これらは今後の学部FD活動へ展開することが重要であると思われる。

<謝辞>

本稿を作成するにあたり、株式会社イノベストのレポート（アンケート調査結果報告）を利用させていただいた。この場を借りて、衷心より感謝の念を表する次第である。もちろん、表現上の誤り等があれば、すべてそれは筆者の責任に帰す。

参考文献

- イノベスト（2017）「2016年度國學院大學経済学部基礎演習B 科目改善とFA制度化 総括レポート」。
- イノベスト（2018）「國學院大學経済学部 基礎演習A アンケート結果報告—学生のタイプ別にみるFA制度活用の効能」。
- 星野広和（2018）「学生ファシリテーター配置によるグループワーク形式授業の学習支援効果」『國學院大學教育開発推進機構紀要』第9号。

注

- 1 5 因子とは、交友志向、職業・専門性志向、自己向上志向、経験関与的課題志向、特定課題志向、である。